

歴史的分野における大観学習を通して見方・考え方を育む授業実践：歴史的分野の題材「室町時代 - 室町時代の主役は誰だ - 」の実践の分析を通じて

著者	勝又 悠太
雑誌名	静岡大学教育実践総合センター紀要
巻	32
ページ	336-346
発行年	2022-03-31
出版者	静岡大学教育学部附属教育実践総合センター
URL	http://doi.org/10.14945/00028723

教育実践報告

歴史的分野における大観学習を通して見方・考え方を育む授業実践

－歴史的分野の題材「室町時代－室町時代の主役は誰だ－」の実践の分析を通じて－

勝又 悠太

(静岡大学教育学部附属静岡中学校)

Teaching Historical Overviews and Practices to Develop Perspectives and How to think Classroom

－Practice and reflection of the unit “Who were the protagonists in the Muromachi
Period ”－

Yuta Katsumata

要旨

本小論では、子どものあられをもとに、室町時代の大観学習の実践を通して、見方・考え方を育むための社会科における授業実践のあり方を考察する。具体的には、「なぜ、室町幕府の力が弱まったのか」という問いについて室町時代がどのような時代だったかを調査・考察し、「室町時代の主役は誰だ」という本質に迫る問いについて歴史的事象を根拠に対話し、室町時代の時代観をつくりあげる授業が、子どもたちの見方・考え方を育むためにどのように寄与したのかを考察する。「室町時代の時代の主役は誰だ」という室町時代における立場の相互関係や変容を捉え、他の時代との比較や現代とのつながりを見だし、室町時代の時代観をつくりあげることを通じて、知識を統合・包括する見方・考え方を働かせる子どものあられが見られた。

キーワード：中学校社会科 歴史教育 大観学習 見方・考え方 室町時代

1 はじめに

静岡大学教育学部附属静岡中学校社会科部では、社会科の学びを通して育みたい人間像を「社会を創る人」とし、主体的に社会に参画できる人間を育む授業づくりを進めてきた^{※1}。主体的に社会に参画できる人間を育成するためには、子どもが授業を通して「様々な解釈の仕方や多様な価値観を尊重しながら、『すべての人にとって最善の社会の姿』を創りあげていく営み」に参加することが重要だと考える。そのため、本校では歴史的分野において、価値観や考え方の違いが生まれる社会的事象を主に取りあげ、様々な視点や立場からその事象を捉えたうえで、その時代の本質に迫るような対話が展開される授業づくりを進めてきた。本稿の目的は、見方・考え方を育む歴史的分野の大観学習を考察することである。そのために、静岡大学教育学部附属静岡中学校1年生を対象とした歴史的分野の単元「室町時代－室町時代の主役は誰だ－」の授業実践を行う^{※2}。その実践の中で、歴史を大観する学習活動に注目し、子どもたちの見方・考え方がどのように育まれたかを考察する。

2 問題の現状と課題

中学校における歴史の授業では、高校受験を見通した教科書の内容に重点が置かれた通史学習が多く展開されてきた。そのような中で、言語活動の充実が叫ばれはじめ、平成20年度告示の中学校学習指導要領解説社会編に「学習した内容を活用してその時代を大観する活動を通して、各時代の特色を捉えさせる」学習として、「各時代の特色を捉える学習」（以下、大観学習とする）が新設された。さらに、平成29年度告示の中学校学習指導要領解説社会編では、大項目、中項目及び各事項のねらいに基づいた学習が展開し、アに示す「知識及び技能を身に付ける」学習とイに示す「思考力、判断力、表現力を身に付ける」学習を有機的に結び付けて、課題追究的な学習の実現を図っている。つまり、学習内容の関連性を重視し、その構造化を図る必要があるということが指摘され、大観学習の拡充が図られてきている。

歴史的分野の大観学習の取り組みでは、例えば単元の最後に授業者が「中世とはどのような時代だったのかをまとめよう」という課題をなげかけるような授業が多く実践されてきた。また、時代ごとに新聞を作成する、単元で扱った社会的事象の関係性を図示するような授業実践も多く見られる。先行する研究者は、次の通り、歴史的分野の大観学習の課題を挙げている。

原田智仁(2013)は、「多くの歴史教科書において大観は章末に記載されるなど定型化しており、生徒に飽きられやすいといった問題が指摘されている」*³と述べている。また中山俊輔(2020)は大観学習の課題を「①単元を通して学習した内容を総括し、各時代の個性を記述しまとめることが目的となっている点、②大観学習がその時代を学ぶことにとどまり、現代とつながっていない点」と挙げている。そのため、歴史的な見方・考え方の育成につながらず、大観学習の意味や意義を感じる事が難しくなっているのではないかと*⁴と指摘している。

両者共に、多く授業者が実践している大観学習の問題点を浮き彫りにするものであることがわかる。大観学習の先行研究を見ても、子どもたちの時代観を形成するために各時代の特色を捉え、歴史的な見方・考え方の育成をめざす学習が実践されているが、その実際は、取りあげる時代のみの内容を概括することとどまり、子どもたちが歴史を学ぶ意義や目的を実感するようなものではない。それはつまり、中学校社会科全分野における見方・考え方の育成につながっていないとも言えるだろう。

以上のような現状と課題を踏まえれば、真に求められている見方・考え方を育むためには、子どもたちがそれぞれの時代観を持ち寄り、時代観を磨き合うことで、時代の概括にとどまらない大観学習を展開する必要がある。そして、子どもたちの主体的な歴史的分野の学習活動を通して、歴史を学ぶことの意義や目的に改めて気づき、公民的資質の涵養につながる単元設定をする必要がある。

3 題材「室町時代—室町時代の主役は誰だ—」の構想と価値

(1) 構想

歴史的分野の大観学習を通して、見方・考え方を育む授業を実現するために、次の三つの観点が重要であると考えられる。

第一に、朝廷・幕府・大名・民衆などの「立場」に焦点化する問いを生みだし、その「立場」の力関係や相互関係を軸に室町時代がどのような時代であったのか考えをもつことである。大観学習の課題でも述べたように、室町時代がどのような時代であったのかを単元の最後に問うたとしても、内容の概括にとどまり、知識を羅列したものになりかねない。とは言え、授業時数が限られている中で、学習内容の広さと深さの両方を保障することも難しい。そこで、その時代で考えさせたい視点を焦点化していく必要がある。焦点化した問いを生みだし深く追究す

ることにより、汎用性のある知識を身に付けることができるのではないかと考えている。ある視点から歴史を探究した際に獲得できる概念を、他の時代に関わる社会的事象や知識の解釈に活用させることで、学習内容の広さの部分为保障できると考えている。そこで、「立場」に着目し焦点化された問いを様々な視点から追究することで室町時代を捉えることを本題材ではねらいとした。

第二に、共有された事実(根拠)をもとに、対話を通して問いに対する他者の考えと自分の考えを比較し、自分なりの室町時代の時代観をつくりあげることである。先述したように立場に焦点化して室町時代を捉えたとしても、視点によって立場ごとの力関係や総合関係の解釈は異なる。過去の出来事を学習するため、事実(根拠)に基づく解釈や共通理解が前提となってくる。そのうえで、室町時代の捉え方について他者の考えと自分の考えを比較しながら共通点や相違点に気づくことが大切であると考えられる。そして、子どもたちがそれぞれ室町時代の時代観をつくりあげ、対話を通してそれぞれの時代観をさらに磨きあうことが重要である。

第三に、多様な視点で歴史を捉えることである。小学校の歴史的学习については、主に歴史上の人物を中心に学ぶこととなっている。また、中学校の歴史的学习においても鎌倉時代までは、主に為政者を中心とした学習内容が中心として学んできている。民衆、国民といった立場で歴史を学ぶことは、多くの子どもたちにとっては新たな視点での歴史の見方である。さらに、自分自身も民衆という立場の一人であるということに気づくこともできるだろう。そして、時代を担う為政者だけでなく、どの時代にも民衆が存在することに気づくことは、より歴史を自分事として捉えることができる一助となると考えられる。

本題材の実践においては、「朝廷・幕府・大名・民衆などの「立場」に焦点化する問いを共有し、その「立場」の力関係や相互関係を軸に室町時代がどのような時代であったのか考えをもつこと」「共有された事実(根拠)をもとに、対話を通して問いに対する他者の考えと自分の考えを比較したり、室町時代を他の時代との比較をしたりしながら、室町時代の時代観をつくりあげること」「民衆の視点で歴史を捉えること」を授業者が大切にすることとして、手だてを講じることとする。

(2) 室町時代で大観学習を行う価値

①室町時代を立場に着目して大観することで得られるもの

飛鳥時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代と子どもたちが学んできた歴史には、どの時代にもはっきりとした為政者が存在した。例えば、奈良時代は朝廷が中心となり、律令国家を築くために様々な法令や決まりが出されていた。鎌倉時代は、武士が幕府を開き朝廷の支配から抜けだし、独自のしくみや決まりで、守護や地頭を中心に地方の支配を強めていった。

では、室町時代全体の為政者は誰だったのだろうか。そもそも、室町時代とはいっつからいつまでをさすのか……。現時点では、研究者によって室町時代の期間の捉えは異なっている。なぜなら、室町時代は、朝廷、幕府、大名ら（守護）などが、その時点での時代背景や各々の力関係の中で、権力をめぐって複雑に動いている時代だからだと考える。

このように室町時代は一つの時代として区分されているものの、朝廷、幕府、大名らの力関係が変化していく他の時代にはない特徴をもっている。そのため、複雑であり、一言では表現しづらい時代であると言える。だからこそ、室町時代を立場に焦点化し大観することで、子どもたちは異なる見方や異なる価値観に出会い、歴史的な見方・考え方を通じて、時代観を磨き合うことができると考える。

②歴史の表舞台に名もない民衆が立つこと

室町時代は、鎌倉時代以前には見ることができない出自不明の農民や商人層の社会進出が現実的なものとなり、名も無き民衆が歴史の表舞台に登場した時代でもある。先に述べた戦国時代に見られた下剋上という風潮もその一例である。

この時代の背景となっているのは、武士から庶民に至るまで「自分たちのことは、自分たちで解決する」という考え（自治）が広まったことであると考えられる。実際に、近畿地方の村々では、農民が団結し、地域を自分たちで運営する惣（惣村）がつくられた。惣（惣村）では、村の有力者や年長者が中心になって寄合を開き、独自で村の掟を作ったり、罪を犯した者を処罰したりした。このような民衆のまとまりが、かんがい技術の向上や、後の商品作物の栽培など農業技術の向上にも影響を与えたと考えられる。

農業生産が向上したことで、行商人が成長していき、陸上運搬を担う馬借や車借、海上運搬を担う問（問丸）などの運送業者も活躍するようになる。金融では京都や奈良などで、土倉や酒屋が数多く誕生し、幕府は保護を加えて、税を取り重要な財源とし

たほどである。また、都市部では商業や手工業が発達し、座が生まれたり、博多や堺では、町衆と呼ばれる富裕な商工業者が自治をおこなったりした。鎌倉時代には民衆が成長していく土壌はあったものの、室町時代に経済や産業の面など多方面でその花が開いたことは事実であろう。

このような民衆の成長は、朝廷や幕府、大名らに対しては、一揆という形で表面化し、決して無視はできない存在になってきていることがうかがえる。代表的なものとして、山城国の南部では、武士や農民が協力し合って、守護大名の畠山氏の軍勢を追い出し、8年間にわたって自治を行っている。加賀の一向一揆も同様に、守護を倒し、こちらは約100年間も自治を行っているのである。

実際に、この後の為政者ら（織田信長、豊臣秀吉、徳川家康など）は民衆の力をどのようにコントロールするかということに知恵を絞る、力を注いでいくわけであり、民衆を無視した政治はできないということが見てとれる。

これまでの歴史においても必ず存在し、人口比率的にも圧倒的に数の多い民衆（一般の人々）という立場に、スポットライトがあたるのは室町時代が初めてだろう。それまで聞こえなかった民衆の息づかいが聞こえてくるのが室町時代ではないだろうか。室町時代を学ぶことで、これまでほとんど着目することがなかった民衆という立場から歴史を捉えることには大変価値があると考えられる。子どもたちが民衆の立場から歴史を捉え直していくきっかけになることが期待できそうである。さらに、この後の歴史に対しても、民衆という立場から歴史的な事象を捉えることができるのではないだろうか。

4 授業内容

(1) 実施時期

令和3年10月

(2) 対象・人数

静岡大学教育学部附属静岡中学校1年生2学級 72人

(3) 題材目標

「なぜ、室町幕府より強い者が現れたのか」を明らかにするために、室町時代がどのような時代であったのかを調べ、歴史的な事象が相互に関係することに気づいた子どもたちが「室町時代の主役は誰か」という問いを共有し追求していく中で、室町時代の時代観をつくりあげる。

(4) 指導計画 (全9時間)

第1時	室町時代に出会い「なぜ、室町幕府より強い者が現れのか」という問いを追求する
第2時 第3時	室町時代を3つに分け、問いについて調査する
第4時 第5時 第6時	調査内容を全体で共有し、問いについて対話する
第7時	「室町時代の主役は誰か」という新たな問いについて調査する
第8時	新たな問いについて対話する
第9時	室町時代観をつくる

5 授業実践の実際

第1時の導入では、授業者が室町時代とはいつからいつまでをさすのか問いかけた。子どもたちは、前時までの学習していた鎌倉時代の滅亡の経緯から予想したり、織田信長が室町幕府を滅亡させたという各自の知識を用いたりしながら、予想を述べ合った。

授業者はここでは結論は出さずに、室町時代の年表と資料を配付しもう少し詳しく見てみようとなげかけ、子どもたちが年表と資料を読みとったところで、何か気づいたことや考えたことはないかと問いかけた。子どもたちの読みとりの一部である。

- ・一緒に鎌倉幕府を滅亡させた後醍醐天皇と足利尊氏が対立している。尊氏がすぐに幕府を立てたわけではない。
- ・朝廷が北朝と南朝の二つに分かれている。どういことだろう。朝廷が二つあるなんておかしい。
- ・そもそも幕府は朝廷のしくみの中にあるものだ。年表を見ると尊氏が光明天皇を立てて北朝をつくったと書いてある。幕府と朝廷の関係性がよく分からなくなった。
- ・足利義満が南北朝を統一した。それまでを南北朝時代というみたいだけど、室町時代ではないのか。
- ・戦国時代が始まると書いてあるけど、戦国時代とは室町時代なのか。
- ・天下統一に向けて、戦国大名が争っていた時代が戦国時代だ。だから、幕府や朝廷は力を失っていたか、すでに滅亡していたのではないか。

子どもたちは、様々な疑問や不思議に思うことを発言した。そこで授業者は立場に着目するために朝廷・幕府・大名を記したカードを黒板に掲示し、どのように力関係が変化したかを問いかけた。子どもたちは年表を見ながら、次のような発言がなされた

- ・幕府と朝廷の関係がはっきりしない。朝廷よりも幕府の立場が上になったのはいつだろう。
- ・それは、尊氏が北朝を立てた時点で幕府の方が力は上になっていたのではないか。
- ・守護から守護大名や戦国大名になった背景がわからない。幕府より立場は上なのだろうか。
- ・戦国時代になったのだから幕府よりも立場は上だろう。
- ・そうすると幕府が1573年まで滅亡しなかったのは不思議だ。

授業者は、子どもたちの発言や疑問をまとめていきながら「なぜ、室町幕府の力が弱まったのだろうか」という問いを全体で共有し、問いを考察するにあたって、室町時代はどのような時代であるか調査をすることを提案した。

第2, 3時では、室町時代を以下のような三つの期間に分け、3人グループで調査活動に入った。

- ①建武の新政から南北朝統一
- ②南北朝統一から足利義政の時代
- ③応仁の乱から室町幕府滅亡

授業者は、子どもたちが立場や視点に着目して調査しやすいように、あらかじめ①～③の期間の資料をそれぞれ用意した。また、問いに対しての考えを立場を明確にして共有できるように、朝廷(南朝)・朝廷(北朝)・幕府・守護(守護大名)・戦国大名・民衆と書かれたカードも用意した。以下は、子どもたちが調査してきた内容をグループで共有し、ホワイトボードにまとめたものである(図1参照)。

① 建武の新政
 武士の差別 → 足利をリーダーにして、湊川の戦い後醍醐天皇を倒す
 武士の不満が高まる

朝廷 ← 517

室町幕府

② 南北朝を統一 ~ 義政
 義政の父が死に幕府がゆらく
 長慶天皇と義満の和平交渉 → 南北朝統一 → 義満が大政大臣になる → 室町時代全盛期
 室町幕府の体制が整えられ、有力守護が将軍を支えて政治を行う
 大内氏による「享徳の乱」、大内氏による「応仁の乱」が起ると、都に大きなダメージ

③ 応仁の乱 & 戦国時代
 九代目将軍争い 義視(義政の弟) vs 義尚(義政のむすこ)

守護 → 守護大名 → 南北朝の御家人
 戦国大名 二下剋上の風潮の中 518

	①	②	③
室町幕府	幕府(守護)に権力が集中(鎌倉) 国内は守護の命頂也 国内の武士は守護の家来 鎌倉は朝廷幕府が並立していた	応仁の乱 子どものいない足利義政の後継ぎ争いになった。 ここで幕府は2つに分かれた 自軍 東軍 11年間争い 1467これを応仁の乱といふ <おまけ> 室町時代に足利家は守護に権力が集中 → 守護大名へ成長	応仁の乱からほどほど 何もできなかった。 → 足利が滅びた。他の大名の 争いもなくなった。他の大名の 後継ぎ争いもなくなった。争いも なくなった。争いもなくなった。
朝廷	南北朝時代 → 2つの朝廷が自立した 建武の新政 → 後醍醐天皇が 御近の人たちや御近の思いを度けた。命令 もゴロゴロかえ。武士や貴族を困らせた。	半済令 → 荘園領主から年貢を 半分とり立て、国内の武士にわけて やる。残りの半分は領主に ひさめた。	特になし。 足利 vs 山内 (完全) 争い → 山内が勝つ → 守護体制 → 二下剋上をすすめる。
守護大名		日明貿易 1404年 中国の公式な貿易 勘合貿易 貿易の際に明の商人に みせる明の商人が持つ勘合 符を合わせることで正式な 貿易になる。	織田氏などが → 下の世に上を 下をくつ政治をしていく。 応仁の乱は争い → 弱体化 の戦国時代(次) 各地方の守護になる。
戦国大名			
守護			

図1 第2, 3時学習活動グループ共有の内容 (筆者撮影)

第4時は、グループで調査しまとめた内容を全体で共有した。ここでは、鎌倉時代や室町時代の三つの期間を通しての様々な立場の力関係の変容に着目

し板書をした(図2参照)。子どもたちの主な発言内容は、以下のとおりである。(下線部は筆者。立場の力関係の変容を捉えていると読み取れる部分に記載)

- ・鎌倉幕府が滅亡したことで、朝廷の権力が復活しそうになったが、建武の新政が失敗したことで武士の反発が生まれ、室町幕府ができるきっかけとなった。だから、室町時代は鎌倉時代と同じで朝廷は幕府よりも力がないままである。
- ・尊氏が出した半済令が守護を守護大名に成長させてしまった大きな原因で、それによって幕府よりも守護の力が強くなっていくと考えられる。
- ・室町幕府のしくみを見ても、鎌倉時代の執権とは異なり、管領を置いている。しかも、管領は有力な守護の交代制をとっている。将軍の力が弱いときは、この守護が実質的な権力をもっていた。
- ・幕府が室町時代を通して、ずっと力を失っていたことはない。義満の時代は、守護の力をしっかりとおさえていて、明との貿易でも日本国王として認められている。朝廷の役職である太政大臣にもなっていることから、幕府や朝廷の力もそこまで弱くないと考える。
- ・しかし、義満の時代が一番幕府の力が強くて、そのあと、守護が守護大名として各地で力もち出したのだ。応仁の乱は、その守護大名の争いに幕府が口を出せなくなって、戦国時代が始まってしまったのだろう。
- ・戦国時代は、もう朝廷も幕府も関係なく戦国大名たちが勝手に争っている時代である。自分の領地に対して、分国法という独自の決まりを出しているのだから、幕府の決まりも朝廷の決まりも守っていない状態だ。

第5, 6時では、これまでのグループや全体での共有をもとにして、子どもたちは「なぜ、室町幕府の力が弱まったのか」という問いについての次のような語り合いがなされた(図3参照)。(下線部は筆者。立場の力関係の変容を捉えていると読み取れる部分に記載)

- ・尊氏が、半済令を出したことで鎌倉時代よりも守護に力をもたせてしまったから、守護大名に成長してしまい幕府の命令を聞かなくなったのだ。しかし、南朝よりも北朝の権威を示すためには仕方がなかったことだ。室町幕府はスタートから失敗している気がする。
- ・南北朝の争いは、鎌倉時代の承久の乱に似ている。朝廷側につくか、幕府側につくかという対立構造と同じである。結局、北朝が中心になって南朝が吸収された形だから、本来の朝廷の権力は幕府よりも下だ。
- ・しかし、足利義満の時代は幕府や将軍の力がとても強かった。この期間は、守護は幕府よりも下の位置にいる。ただ、義満が太政大臣になったということは朝廷の権力がまだまだ存在しているということだと思う。幕府よりも朝廷の方が強い権力をもっているとも言える。
- ・義満の時代がピークで幕府や将軍の力がどんどん衰えてきた。幕府と守護大名の力関係が逆転するのは、応仁の乱が決定的な出来事となり、守護大名が戦国大名となって争いだしたのだと思う。つまり、大名たちの争いに幕府が口を出せなくなったのが強い者が現れた背景だ。
- ・室町時代における強さとは何だろう。武力なのか権力なのか。朝廷がなくなっていないことも考えると、朝廷にも何らかの力はあったと考えられる。



図2 第4時全体共有板書内容(筆者撮影)

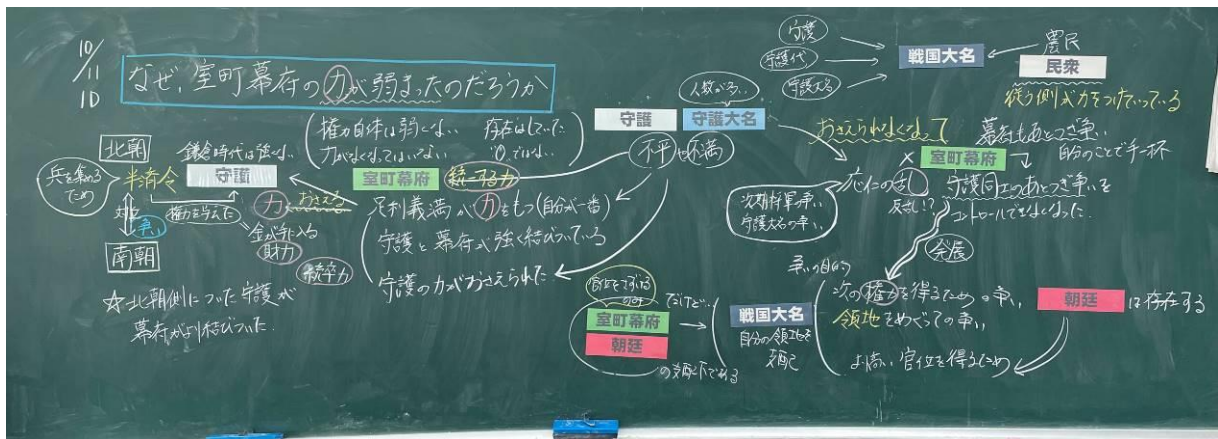


図3 第5時全体共有板書内容（筆者撮影）

子どもたちの語り合いは「強さとは何か」「力とは何だろう」という方向に向かっていった。そこで、授業者は強さの定義はそれぞれの考えでよいこととし、「室町時代の主役は誰か」と問いかけた。すると、子どもたちのからは以下のような立場が予想された。

- | | | |
|-------|---------|-----|
| ・守護大名 | ・戦国大名 | ・幕府 |
| ・将軍 | ・朝廷（天皇） | ・民衆 |

子どもたちから一通り考えが述べられたところで、授業者は、特に民衆が主役であると考えた子どもは「幕府が主役であっても、守護大名が主役であっても、年貢という形で財政を支えているのは従えている農民や商人である。そう考えてみると、民衆が主役とも言えるのではないだろうか」と発言し、この発言をきっかけに室町時代の民衆の生活を調査し、室町時代の主役はだれかという新たな問いについて考えようとなげかけた。

子どもたちは民衆の立場から時代を捉える新たな視点を得て、第7時では、室町時代の民衆の様子も調査も含め、「室町時代の主役は誰か」という問いに対する個人での考察を深めていった。以下は、考察の一部である。

- ・農民の様子を見ると、田楽のように農業が計画的、組織的に行われるようになった。その基盤となったのは惣村という形で自治がなされるようになったからだ。水の引き方や田植えの時期を決めることを話し合いで決めていることは現在でも行われていることだ。
- ・各地で一揆が起こっていることがわかった。山城国では、地元の有力な武士が農民の協力を得て、守護大名の畠山氏を追い出し、8年間も自治をしている。守護大名に従うはずの民衆に追い出されるなんて驚きだ。

- ・一揆では、守護大名や戦国大名にいろいろな要求をしている。徳政令を出せとか関所を設けるなどか、結局大名たちはその要求をのんでいる。民衆の力を無視できなくなっているのではないか。
- ・交通網も発達して、馬借や問丸などの運送業者も現れた。商工業者は座をつくって朝廷や寺社などの税を支払うことで保護を受けて儲かっていたようだ。関所での通行税は幕府や朝廷の収入源である。幕府や朝廷は民衆の力をうまく利用していたと考える。

第8時では、これまでの調査内容や個人での考察を踏まえて、問いに対して考えたことを全体で語り合うと、以下のような発言がなされた。

- 【幕府・将軍が主役と考えた発言】
 - ・室町幕府が主役だと考える。なぜなら、守護大名はあくまで幕府のしくみの一部だからだ。応仁の乱の原因も元をたどると将軍家の跡継ぎ争いが発端である。その争いが広がったと考えると、幕府や将軍の影響力が大きいことがわかる。
- 【朝廷が主役と考えた発言】
 - ・室町時代のはじまりがはっきりしないのは、正式な朝廷が室町幕府を認めたかどうかという点が曖昧だからだ。そのように考えると、朝廷の許可のもと、幕府は存在していると言える。
- 【守護大名が主役と考えた発言】
 - ・尊氏が守護を味方につけようとして半済令を出した。そして、朝廷のしくみの一部である国司の権力を吸収した。そのおかげで幕府が成立したと考えると、室町幕府は鎌倉幕府とは異なり、守護に大きく支えられている幕府と言える。だ

から、守護が守護大名に成長できたのだと思う。室町時代は守護大名が主役だ。

- ・義満が将軍の時代だけ、守護の力がおさえられていた。つまり、それ以外は守護の力が強かったと言える。特に、応仁の乱は守護大名の争いが幕府や日本全体を巻き込む争いになってしまった。

【戦国大名が主役と考えた発言】

- ・守護大名も主役と言えるけれど、やはり守護大名は室町幕府があつての役職である。戦国大名は室町幕府から独立して、領国を支配した人たちである。だから、分国法を出して独自に領地支配をすすめることができた。
- ・下剋上の風潮を考えると、もう立場の差は関係ない時代であったと言える。強い者が勝つ時代である。その風潮の中でのし上がってきた戦国大名こそ主役にふさわしいだろう。

【民衆が主役と考えた発言】

- ・民衆は圧倒的に人口が多い。戦国大名はわずか280名ほどしかいない。一人一人の力は弱くても、惣村や座など民衆がまとまることができた。そのため、守護大名を追い出すことに成功した地域もある。室町時代の民衆の力は、権力をもっている人の立場を脅かす存在であったのではないか。
- ・戦国大名は分国法で領地を支配したとあるが、民衆の力を恐れたからこそ、決まりで力をおさえようとしたのではないか。また、室町時代の民衆がつくった文化は今につながるものが多いことがわかった。その後の歴史に最も影響を与えるものを主役とするのなら、民衆が主役と言えるかもしれない。

このように主役について対話をしていくと、子どもたちは室町時代の主役となり得る者がもつ「力」とは何を表すのかという話題になった。子どもたちが考えた「力」を分類すると主に以下のようにまとめられる。

- ・政治力 ・権力 ・影響力 ・支配力 ・武力
- ・経済、政治を支える力

特に、子どもたちの興味は、政治をする力と政治を支える力のどちらが室町時代においてどちらが重要であるかという議論になった。そのような議論が

なされる中で現在の日本の主役は誰かという話題があがった。授業者は、その話題について取りあげ、さらに語り合いを進めた。以下は現在の主役は誰かについての対話の一部である。

- ・室町時代の主役が民衆というならば、現在の主役は国民だと思う。室町時代では年貢で幕府や領国の経済を支えていたわけで、現在は国民の税金によって国が成り立っている。だから、支える側が主役になることも考えられる。
- ・でも、結局、大きな決断をしたりすることができるのは、政治家の力の方が大きいと思う。結局、政府の決断に国民が納得して従ったり、振り回されたりするでしょ。コロナも対応もそうだし。
- ・でも、今は国民主権だから、文字通り国民が主役だよ。
- ・幕府や、領国の支配権をもつ守護大名や戦国大名が民衆から選ばれたのであれば民衆が主役としてもいいけれど、室町時代はほとんど世襲制で生まれながらにして支配権をもっているから、支配する側が主役だと思うけど。
- ・民衆が支配をする権利を与えるような現在の形と室町時代は異なるね。国民主権は、民衆が望んで勝ち取った権利だと思う。そうすると、室町時代の一揆が成功した地域は、民衆が主役と言えるけれど、そうでない地域は何も考えずに従っていた民衆が多かったと言えそう。

第9時では、「室町時代の主役は誰だ」という問いについて語り合ったことを踏まえて、「あなたの室町時代観をつくろう」となげかける。子どもたちは、これまでの学びを通して、以下のような室町時代観をつくりあげた。

【生徒A】

- ・室町時代は権力や立場が分立している時代である。朝廷や幕府を後ろ盾に、守護大名が存在する。そして、その守護大名も民衆の経済力に支えられている。戦国大名も同じく、領地を支配するにあたっては民衆の経済力や自治力は不可欠である。つまり、どの立場も互いに支えとなり、時として互いの立場を脅かす存在であったのではないだろうか。平安時代は、朝廷が中心となり政治をして、鎌倉時代は鎌倉幕府が政治の中心であることを考えると、はっきりとした

政治の中心的な立場が存在せずに、いろいろな立場がそれぞれに権力をもった時代だと思う。

【生徒B】

・室町時代は、全国的なまとまりではなくそれぞれのまとまりが強くなった時代だ。だから、はっきりとして権力者がいない時代とも言える。時代の主役が、例えば全国的なまとまりの長である将軍などではなく、守護だって民衆だって団体（治める地域）をつくって成長している。そう考えると、大きな視点で見るか小さな視点で見るかで主役は変わってくるのだろう。

【生徒C】

・室町時代は現代の日本社会に最も影響を与えていると思う。特に、国民（農民）の暮らしの基盤をつくったと言っていいほど、大きな影響を与えている。それは、主に応仁の乱後の下剋上によって民衆の力が発揮されている。例えば、一揆。これは現代では職場の環境に不満をもったときに、仕事仲間的一致団結しストライキをおこすことに似ている。また、民衆という言葉は何百万人もの人を含めての言い方である。そこから生まれる民衆の多様性（商売の仕方、自治の仕方など）と、軍事力や年貢などの富、この2つで国や領国は支えられていたと考える。

6 考察

授業実践の結果と、子どもたちの発話記録、1時間ごとの授業のふりかえりを基に考察を行う。特に、先述した本題材で授業者が子どもたちのあらわれを分析し、大観学習を通して社会科における見方・考え方が育めたかという点で考察をしていく。

【授業者が願う子どもの姿】

- ・朝廷・幕府・大名・民衆などの「立場」に焦点化する問いを共有し、その「立場」の力関係や相互関係を軸に室町時代がどのような時代であったのか考えをもつこと
- ・共有された事実（根拠）をもとに、対話を通して問いに対する他者の考えと自分の考えを比較したり、室町時代を他の時代との比較をしたりしながら、室町時代の時代観をつくりあげること
- ・民衆の視点で歴史を捉えること



【手だて】

- ① 「問いを共有する」
- ② 「焦点化を見通した問いの設定」
- ③ 「価値観の対話ができる場面の設定」

手だて①について、子どもたちが「なぜ、室町幕府の力が弱まったのか」という共通の目的に向かって、解き明かしたいという思いを抱きながら、室町時代がどのような時代であったかを調査する動機をもつことができた。実際に「朝廷と幕府の力関係の移り変わりを探りたい」「守護大名や戦国大名がどのようにして成長してきたのか明らかにしたい」といった、室町時代の全体像を明らかにして問いの解決に向かう発言が見られた。このような発言が見られたのは、題材の出会いの場面における初発問や資料の提示が有効であったと言えるだろう。授業者が与えた問いではなく、子どもたちが共有された問いを生み出していくことは、学習する時代像を明らかにして、問いに関わる様々な社会的事象の関連性を自分事として捉えていく一歩であるとも考えられる。

手だて②について、ある時代の全体像を捉える際に、多くの視点から捉えることができるため、対話の場面において一つの視点で語り合えるような問いを意図的に設定した。本題材では、子どもたちが「立場」に着目した問いが生み出せるように手だて①の場面が展開できた。そのため、調査内容を共有する場面や問いについての考察を語り合う場面でも、「立場」を軸に対話することができて、語り合いの内容が多様な視点に広がりすぎずに子どもたちの中でも整理された形で発言がなされた。そのため、子どもたちの発言を分析すると、立場の力関係の変容を中心に語られている。子どもたちが問いを追求する際に話題となった力関係の変容の捉えが「経済力」「政治的影響力」「支配力」「主従関係」といった多面的・多角的に室町時代を大観することにつながったと言える。

手だて③について、「なぜ、室町幕府の力が弱まったのか」という子どもたちが追求してきた問いに加えて、「室町時代の主役は誰だ」という新たな問いを設定したことで、子どもたちが考えの根拠や互いの価値観について語り合い、相手の見方や考え方に対する理解を深め合うことができた。主役という抽象的な言葉ではあったが、子どもたちにとっては、割と身近な言葉であり思いや考えを込めやすかったと思われる。それに加えて、それまでの授業過程において室町時代はどのような時代であったかを事実に基づいて十分に共有してきたため、室町時代という時代背景の中での主役論が展開された。主役をどのように捉えるかがそれぞれの価値観を用いた対話であり、具体的には「経済力を持つもの」「武力をもつもの」「政治をするもの」「影響力があるもの」「主従

関係において、従える側のもの」といったように歴史における力をどのように概念的に捉えるかといった対話にもつながったと言える。

さらに、3つの手だてを関連付けることで、室町時代の主役は誰かという語り合いから、現在とのつながりを見出ししていくような語り合いに発展したと考えている。今を生きる子どもたちが室町時代に身を置いて、各自の時代観に基づいて対話ため、現代の時代観から生まれた発言が見られるのは偶然ではないと考える。歴史を学ぶことがその時代を知ることだけではなく、私たちの生きる時代の社会の見方や考え方にも影響を与えたと言えるだろう。

最終時の時代観をつくらうとなげかけて子どもたちの記述を分析すると、生徒Aや生徒Bの記述からは、幕府、守護大名（戦国大名）、民衆の立場の違いやそれぞれが担っている役割について考察が深められていることが読み取れる。また、室町時代と他の時代を比較し、力に着目し相違点を分析することができている。学習している時代だけではなく、共有された問いを解き明かしていく過程で、ある概念的な視点（ここでは力）を得て、その視点から歴史全体を見ることができるのは、見方・考え方が育まれていると言えるだろう。

生徒Cの記述からは、現在とのつながりを意識した記述が見られた。記述から推察すると、生徒Cにとって、室町時代の主役は誰だという問いについて追求する時間の後半の話題に上がった現代とのつながりについての語り合いが印象的だったのだろう。民衆の多様性に気づいていることも、捉え方が現代的な見方であることも分かる。本題材の歴史的分野の学習を通して、歴史を学ぶことの意義や目的に改めて気づき、公民的資質の涵養につながったと言えるのではないだろうか。

7 成果と課題

本題材の実践の成果として、次の3つがあげられる。

第一に、室町時代を大観するための問い「なぜ、室町幕府が弱まったのか」を追求しその過程で「室町時代の主役は誰だ」という新たな問いをなげかけたことで、立場という視点を軸に、子どもたち同士の価値観（時代観）を磨き合う対話が生まれたことである。つまり、大観学習が、学習内容の復習や要約に留まらずに実践できたことでもある。

第二に、仲間との対話を重ねることを通して、他の時代との比較や変容の仕方など、多面的・多角的に考察することができたことである。

第三に、「主役」という言葉を問いに用いることで、現代とのつながりを意識した対話が生まれ、歴史的分野の学習に留まらず、現代社会に対する価値観についての発言が見られたことである。

以上の3つが有機的につながり、題材全体を通して実現できたことにより、子どもたちの室町時代の時代観が磨かれ、歴史的分野だけではない社会科全体の見方・考え方の成長につながったと言える。

本題材の実践を踏まえて残された課題としては、歴史的分野の全体の学習を通して、どの時代でどのようなものを概念的に習得させるのかということが構造化されていないという点である。本題材では、「立場」を軸に室町時代の大観学習を実践したが、例えば古代での大観学習で習得させたい概念は何かなど、年間あるいは3年間といった長期的な見通しをもった単元構成は考慮されていない。大観学習が内容の概括にとどまり、知識を羅列したものに収束しないためにも、見通しをもった単元構成がなされなければならない。

8 おわりに

本題材の実践では、子どもたちは「なぜ、室町幕府の力が弱まったのか」「室町時代の主役は誰か」という2つの問いの追求を通して、立場を軸に室町時代を大観し、自分の価値観を用いながら室町時代の時代観をつくりあげていった。その過程の中で、歴史的な事象を根拠にして、他の時代と比較したり、現代とのつながりを見いだしたりしながら「室町時代における力とは何か」「室町時代の経済を支えるものは何か」「為政者と民衆」など概念的な見方・考え方を育んでいったと言える。

歴史的分野の学習が歴史的な事象の理解にとどまらず、私たちが生きる現実の社会との共通点や相違点を見だし、その学びを今にいかそうという営みは、社会科で育みたい人間像に合致するものだと考える。

【注】

- ※1 静岡大学教育学部附属静岡中学校・村山功 (2019)『対話が深める子どもの学び—教科ならではの文化を味わう授業—』pp. 50-53
- ※2 本授業の実践は、令和3年度10月に実践した。授業案は、本校ホームページ (<http://fzk.ed.shizuoka.ac.jp/shizuchu/edureserrch/3259/>)
- ※3 全国社会科教育学会(2013)『社会科研究』第78号 pp. 1-12

※4 熊本県社会科教育学会(2020)『社会と人間
(14)』pp. 23-30

【参考文献】

呉座勇一(2015)『一揆の原理』ちくま学芸文庫

五味文彦(2000)『武士の時代－日本の歴史』

岩波ジュニア新書

本郷和人(2018)『考える日本史』河出文庫